

< 2014年 12月 >

古賀 順子

### クリスマス・バレエ「くるみ割り人形」

12月に入ると同時に、パリは急に気温が下がりました。冷たい風に揺れるノートルダム寺院広場のツリー、きらきらと輝くシャンゼリゼ大通りのイルミネーション、お花屋さんに並んだモミの木、シクラメン、ポインセチア、今年もクリスマスの季節になりました。

パリ・オペラ座の今季クリスマス・バレエは「くるみ割り人形」。「白鳥の湖」「眠れる森の美女」と並び、チャイコフスキー三大バレエの一つで、マリウス・プティパの振付けからのヌレーエフ版です。出産休暇から復帰したドロテ・ジルベールとマチュー・ガニオ組、ルドミラ・パリエロとヴァンサン・シャイエ、メラニー・リュレルとユーゴ・マルシャンなど、花形ダンサーたちに並んで大抜擢されたのが、レオノール・ボラックとジェルマン・ルーヴェの二人です。怪我で出場できなくなったエトワールのアマンディーヌ・アルビソンに代わって、コリフェ(エトワールから三ランク下)の二人が選ばれました。

1995年からパリ・オペラ座バレエ団を率いてきたブリジット・ルフェーブルが、今年11月70歳で引退。彼女の後任ディレクターになったのが、1977年ボルドー生まれのバンジャマン・ミルピエです。2001年ニューヨーク・シティ・バレエ団のエトワール、振付けも多い現代バレエの牽引者です。パリ・オペラ座バレエ団が現代の感性を失わないよう、新風を吹き込んでくれることを期待されている人物です。そのミルピエの抜擢を担って、コリフェの二人がクリスマス・バレエの大舞台で主役クララと王子を踊っています。前回に観たドロテとマチュー組のテクニク、華やかさ、安定感、見せる・決める瞬間の美しさ、難しさを感じさせない舞台とは異なり、新人の初々しさ、若々しさ、一生懸命さが伝わってくるバレエでした。難しく見えない動きは、人の何

倍もの努力の結果であることを改めて実感します。自分らしさを失わずに伝統を受け継ぐことは、どの世界でも簡単ではないと思います。身長や体重など、身体的な条件が大きな要因となるダンサーたちが、自分の体型も含めて、決められた動きの中で個性を育んでいくことは厳しい試練に違いありません。能や歌舞伎の伝統芸能にあっても、動きの型を突き詰めていくことで、その枠に収まりきれない自分らしさ、個性に出会うと聞いたことがあります。非個人的な制約を通して初めて個性に至る、その過程で自分を見失わない強さ、自信、誇りを得ていくことが伝統の魅力なのかも知れません。

クリスマス・イヴの夜、主人公クララと叔父さんからプレゼントされたくるみ割り人形をめぐる物語は、ホフマンの童話「くるみ割り人形とねずみの王様」をアレクサンドル・デュマが書き換えたものを台本にしています。午前零時の鐘が鳴ると、ねずみの軍団とくるみ割り人形率いる兵隊の戦いが始まります。七つの頭を持つねずみの王は闇と悪を象徴し、クララの助けでくるみ割り人形軍が勝利します。そのお礼に王子はクララをお菓子の国へ招待します。もみの木の森を抜けて、雪の王国を渡り、ドラジェの国でスペイン、アラビア、ロシア、中国の踊りに迎えられます。クララの夢の中で展開される幻想的な物語には、勧善懲悪、旅と重ねられた思春期の少女の成長が暗示されています。

そして、この夢の世界とバレエを融合させているのが、チャイコフスキーの音楽です。小さくなったクララに襲いかかるねずみたちを退治するおもちゃの兵隊の「行進曲」、美しいハーブで始まる「花のワルツ」、雪と一緒に天から降りてくるような澄んだ子供たちの合唱が叙情的な「雪片のワルツ」など、有名な曲が相次ぐ二幕(1時間40分)の舞台は、あっという間に過ぎていきます。

キリストの降誕を祝うクリスマス。カトリック信者でなくとも、慌しい日常を離れて、特別な思いで迎える日です。バレエ、コンサート、クリスマス市など、人によってクリスマスを喚起するものは違うと思いますが、来年への新たな思い、期待、希望を持ちたいと思います。